

# 「学び方」が身につく学習のすすめ

高橋 充

## はじめに

「生きる力」の育成が教育のキーワードとなっている。第15期中央教育審議会の第一次答申でも、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」を重要な要素のひとつとして挙げている。この「生きる力」を育むためには、問題解決的な学習に焦点をあてた「学び方」を身につけることが不可欠と思われる。

英語科においても、基礎・基本がある程度定着してくると生徒は「学び方」についての疑問をもったり、自分なりに工夫し始める。その段階で我々が生徒にしてあげられることはないのか、というのが本稿の主題である。生徒が問題を持ち、見通し、解決を試み、評価して、「生きる力」を獲得していくときに、我々が彼らのためにできることを考えてみたい。

以下、「学び方」を学ぶことにつながっていく活動をいくつか紹介したい。実際に長い間実践してきたものであり、効果があると考えているものである。

## 相談の時間

教室でやってきた活動のひとつに「相談の時間」というのがある。授業中に何度か、問題を投げかけて、生徒どうしに相談させるのである。ペアのときもあればペアを合体させて4人や6人で話し合うこともある。

いわゆる、ペアワークとして言語活動をするときもあるが、質問についてお互いが考えていることを話し合う時間のほうが多い。学び合いの性格も備えているが、そこから「学び方」に進むことをねらっている。

例えば、新しいレッスンのトピックが宇宙飛行士だとすると、最初の授業でそのことについて4人ぐらいで情報を交換させる。ひとりひとりの知識は少

しでも4人となればお互いにとっての新しい情報もあり、それらはレッスンを読んでいくときにとっても役に立つ。相手がどうしてそのようなことを知っているのか、どうやって知ったのかと話が展開すれば、「学び方」についての情報交換ということになっていく。

それぞれの学習段階で取り上げなければならない文法事項がある。それらについて生徒から出てきた質問を取り上げたり、教師から質問を投げかけたりして、相談させることもできる。生徒の学習意欲を刺激するような、学習レベルにあった発問が求められる。生徒はここでも自分の考えを出し合って答えを見つけようとする。

たいせつな表現の定着のために和文英訳や自由英作文をやらせることもある。クラス全員での検討に進む前に、各自が原案をもった段階で相談に進ませる。お互いがもっている知識をすべて使って文法上の疑問点を話したり、まちがいを訂正しあったりする。折にふれて、参考書についてや勉強方法について話し合うことがあり、いろいろな「学び方」を知り、自分の「学び方」の参考にしていく。最後に全員で答えを確認するが、各グループの意見を取り入れて答えを数種類提示することもできる。

「相談の時間」の延長線として、学年が進むとグループでまとまった文章を読むときがある。それぞれのもっている知識や英語の力を出し合って読んでいくのであるが、総合的に問題を解決していく学習形態で、生徒が遠慮しないで疑問や考えを出せるような雰囲気づくりがたいせつである。机間指導で直接質問に答えたり、グループから質問カードを提出させてそれに回答したりして、読みを深めることを勧めたい。必要であればクラス全体の問題として取り上げることもできる。もちろん、この活動の主体は生徒どうしであり、そのことで意欲が高くなっていく。

## テープジャーナル

習字などでは練習作品をすべて保存しておくことを勧めることがある。書き始めのものと最後のものを比べさせて、自分の練習ぶり、上達ぶりをわからせるためらしい。

似たようなことを英語でも試みることができる。「テープジャーナル」と名づけているが、わかりやすく言えば練習兼記録用テープによる活動である。

4月当初にカセットテープを1本準備させ、それに年間の音声活動をすべて保存させていく。リーディングやオーラルレポート、インタビューなどである。

リーディングの評価のために、年に何回かレッスンが終わると本文を読んで録音したテープを提出してもらう。レッスンに入る前にも1度録音してもらえば聞いたときに違いがわかって、本人には刺激になると思う。多くの生徒がテープレコーダーを持っているので自宅で録音できる。もちろん、学校でも録音できるようにLL教室等に器材を何台か準備しておく。

連休や長期休業の後で提出してもらうのがオーラルレポートである。印象深かったでき事やある1日の生活を英語で吹き込んでもらう。原稿を作らないでいきなりマイクに向かって話すことがたいせつなので、そのように伝えるが、なかなか難しいらしく原稿を作って読んでいるケースも多い。それでもいいと思っている。

いずれの場合もたいせつなのはコメントを添えて返してやることである。ALTと分担してテープを聞いた後でそこに英語で感想を吹き込んで返してやる。ほめて、励まして、すこしアドバイスする。ALTからの返事のほうがうれしらしい。JTEからとALTからの返事の回数が平等になるように留意している。

学期に1度くらいの割合でインタビューテストを行う。ALTに協力してもらい、日本人教師が一斉授業を行っているときに、別室でやってもらったり、昼休みや放課後に2人で生徒を分担して進める。学年によって内容や程度が違うが、自己紹介程度の易しいものから生徒にトピックを準備させてそれについて話し合うものまでいろいろ可能である。1対1でやるので、緊張もするが他の生徒に聞かれないのでできるという気安さもある。この活動も生徒用のテープに録音しながら行う。後で聞いて自分の英語を自

分で評価できる。

テープを利用したこの活動の利点は自分の英語の変化がわかるということである。年度始めの英語と年度末の英語を聞いて比較してみれば進歩の具合がよくわかる。努力が足りなければそれも表れる。自分の取り組みを検証したり、修正したりする振り返り学習になっている。年度末にLL教室などを利用して1年分の自分の音声活動を聞かせる配慮も必要である。そこから課題を見つけたり、意欲が出てくればさらによい。

## 自由研究

長期休業中の課題として自由研究を出すこともある。小学生の宿題に理科や社会科、生活科の自由研究が出されることをヒントにしたもので、「英語についてどんなことでもよいので研究して休み明けに提出してください」と伝えるのである。例を出せばそれにとられるケースが多いのでいっさい出さない。

休みが明けると各自のくふうされた研究が出てくる。それぞれが課題を設定して解決した労作である。

調べ学習といわれるものが多いが、和製英語と正しい英語を比較したもの、体の部分の図に英語と日本語を添えたもの、ロックバンドの名前の意味を調べたもの、英字新聞の易しい、おもしろい記事だけを編集し直して作った私家版の英字新聞、行きたいと思っている国や都市について調べて作った観光案内などさまざまである。課題を追求する段階で何をどのように調べればよいのかも学ぶことができる。最近であればインターネットが大いに役に立つ。

なぜ英語を勉強しなければならないのか、いくら勉強しても英語がわからないのはなぜか、という自分たちの切実な問題についての論文も提出されることがある。自分たちの学習方法について疑問を抱き、検討しているものもある。

女子に多いのはクッキングについてのもので、英語のレシピを日本語に直したり、日本の料理のレシピを英語で作ったりする。

## 課題学習

使用教科書とは別にサイドリーディングとしてまとまった冊子を読むことがある。環境問題を主に取り上げてきたが、その場合に前もって課題学習を課することがある。空気汚染、水質汚染、地球温暖化、

野生物、ゴミ問題、リサイクル、ダイオキシン、オゾン層破壊、熱帯雨林などから自分で調べたい項目をいくつか選ばせて、それについて情報を集めさせるのである。ただし、毎日の生活の中で利用できる情報源を使わせる。わざわざ図書館へ行ったり、本を買ったりしなくても、自宅や学校で利用できる新聞とか、自分が読んでいる雑誌、テレビやラジオの番組などから集めることのできる情報に限らせる。

もちろん、いろいろ調べてもよいのだが、あまり時間的な負担をかけたくない。もうひとつは、日々の生活の中で新聞や、雑誌、テレビ、ラジオだけからでもいかにたいせつな情報を集めることができるのかを知ってもらいたいと思っている。

英語の「学び方」とは関係ないように思われるかもしれないが、英文を読むときには英語力のほかに、背景などの知識が必要である。そのための基礎知識の収集である。

「知識をすべて使って読め」とよく生徒に話すが、この課題学習をやることでその実例を示すことができる。

自由研究、課題学習を通して、調べることの楽しさを知り、課題を解決できるように導きたい。

### テレビやラジオの語学番組

NHKテレビやラジオの語学番組は充実している。例えば、ラジオであれば第2放送で基礎英語1～3、英会話入門、英会話、やさしいビジネス英語と種類があり、聞く人の英語のレベルに応じて選ぶことができる。

学校の授業で十分であればいいのだが、不足を感じていて、さらに学びたい生徒にはぜひ勧めたい。放送時間も20分から30分であり、生活のリズムに合わせて聞けるように再放送があり、必要に応じて利用できる。録音して繰り返し聞くこともできる。あふれるような市販の英会話教材に比べてテキスト代が安い。必要なのは学ぼうとする意欲である。

年度始めに各番組の内容とレベルを紹介して、聞くように勧めている。なかなか続かない生徒もいる

が、意外な生徒が1年間続けたなどと教えに来てくれ、うれしくなることもある。

経験を積み重ねた一流の先生に授業を教わっているのと同じであり、「学び方」についても十分配慮された構成になっている。

### おわりに

以上、「学び方」が身につく学習について紹介したが、最後に教師や生徒の経験についてふれたい。教師が自分の経験を語ったり、他の生徒の経験ややり方を紹介してさまざまな「学び方」を提示することもたいせつだと思う。語学学習では、多少の個人差はあるものの、そんなに独創的な学習法というのではなく、かなりの忍耐が要求される。それをいくらかでも楽しいものにするために効果的な方法を教えることがたいせつになる。

ノートの取り方など、標準的なものを作って全員におすすめとして配ることができる。生徒のノートでよくできているものをコピーして配るのも意欲を高めてくれる。学習のしかたのプリントや教科担任としての方針も年度始めには配りたい。最近は年間指導計画や評価基準を配っておおよその進度や方針を説明する教師が多くなっている。

コミュニケーションの楽しさも伝えたい。外国語を使って意思が通じることの喜びやたいせつさは繰り返し教えたいし、海外での体験なども生徒は喜んで聞く。

英語は簡単に身につく教科ではない。辛抱強く取り組む一方で、生徒に興味・関心をもたせるような授業のくふう、生徒を中心に据えた活動のくふうが求められる。そして、生徒が、英語の学習が楽しく役に立つものであるという実感ももちながら、課題に主体的に取り組むことができ、学んだことをその後の学習や生活の場に生かすことができるように配慮したい。

(秋田県総合教育センター指導主事)